「金銭を愛することがあらゆる悪の根・・」　　辻　　喜　男

表題の言葉は、新約聖書からの引用です。紀元一世紀にキリストの教えを地中海沿岸の各地に伝えたパウロが、愛する弟子であり、同労者であったテモテに送った手紙の一節です。テモテは二十歳の頃、パウロによって見出され、その後弟子として、また同労者として働いた人物です。パウロは生涯独身を通したことで子どもがいませんでしたが、このテモテを「真のわが子」と呼ぶほどに愛していました。パウロはこのテモテ宛の手紙で、当時の教会で起こるいろんな問題を取り上げて、具体的に指示を与えています。

その一つ「金銭」についての指示には、次のようなことが記されています。

「私たちは、何もこの世に持って来なかったし、また、何かを持って出ることもできません。衣食があれば、それで満足すべきです。金持ちになりたがる人たちは、誘惑と罠と、また人を滅びと破滅に沈める、愚かで有害な多くの欲望に陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。」(新約聖書「テモテへの手紙第一」6 章 7 節~10 節)

また新約聖書の別の個所には、このパウロの警告通り、金銭の欲にかられて悲惨な死を迎えなければならなかった人物がいたことも記しています。イエスを裏切ったことで知られているイスカリオテのユダです。彼はイエスによって十二弟子のひとりに選ばれた人物でした。しかしイエスと共に行動しながら徐々に、イエスが自分の期待から外れるように思われ、またお金の扱いについてもイエスに不信を抱くようになっていきました。彼自身も仲間のお金を盗むようなこともあったようです。あれこれ積み重なって、ついにイエスを十字架につけようと画策していたユダヤ人の指導者たちから銀貨三十枚を受け取り、ついにイエスを裏切ってしまいました。イエスに従うよりもお金の魅力に引き込まれたのです。ユダがイエスを裏切った動機は、詳しくは記されていませんが、彼のお金に対する執着心が動機の一つであったと考えられます。ただその後、イエスが死刑に定められたことを知って、彼は大いに後悔し、お金を指導者に返して「私は無実の人の血を売って罪を犯した。」と言って自分の命を絶ってしまいました。「後悔先に立たず」です。テモテに宛てた手紙の一節は、まるでこのユダのことを思い浮かべながら書いたかのようです。

今話題になっている、ドジャーズ大谷選手の専属通訳であった水原一平さんも、お金の魅力に引きずられたのではないかと思います。「金銭を愛すること」だけで人生を終わらせてしまっては、なんともったいないことでしょう。聖書には、金銭よりももっと魅力のあるものが記されています。ご一緒に聖書の魅力を探してみませんか。